

令和元年度 白石町立有明中学校 学校評価 結果

1 学校教育目標 <p style="text-align: center; font-size: 1.2em;">心身ともに健康で、 主体的に学び行動し、 未来を拓く生徒の育成</p>	2 本年度の重点方策 (1) 「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指した指導方法の工夫と実践 (2) 自ら考え正しく判断し、他を思いやる行動ができる生徒の育成 (3) 特別支援教育推進体制の構築 (4) 部活動マネジメント力の向上 (5) 学校・家庭・地域・小学校とのつながりを大切にした「地域とともにある学校づくり」
---	--



3 目標・評価							
(1) 「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指した指導方法の工夫と実践							
領域	評価項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(達成度の理由)	具体的な改善策
教育活動	●学力向上	個に応じた指導や対話活動を重視し、わかる授業に向けた指導方法の工夫及び改善	◇授業で発表し、話し合いに積極的に参加したりする生徒の割合を80%以上にする。 ◇家庭学習に継続的に取り組んでいる生徒の割合を80%以上にする。 ◇全教科・項目について学習状況調査等で県平均を上回る。部活動の充実	・道徳を含めて対話活動をできるだけ多く取り入れ、思考力の向上を図る。 ・他者に学んだことを教える活動を取り入れる。 ・定期的な宿題を出し、生徒の家庭学習を習慣化させる。 ・「サクセスノート」を有効に活用し、授業と家庭学習との関連を図るように継続的に指導する。	B	・「授業で発表し、話し合いに積極的に参加した」とアンケート回答した生徒の割合は61%であり目標達成できなかった。 アンケートスコア【72】 ・「家庭学習に継続的に取り組んだ」とアンケート回答した生徒の割合は76%であり目標達成できなかった。 アンケートスコア【75】 ・12月に行われた学習状況調査によると、1年は5教科中すべてで、2年生は5教科中2教科で県平均を上回った。下回った教科についても県対比0.92以上でありあと少しの状況である。 アンケートスコア【76】 ・中1国語・英語(全時間)・中2国語・英語(週2時間)・中3国語・英語(週2時間)においてはTTあるいは少人数指導を行った。また放課後学習においては3年生の受験対策を中心に約50回実施した。	・新学習指導要領に対応した「主体的・対話的で深い学び」についての研究・実践を道徳科で培った対話活動を生かしながら、さらに推進していかねばならない。 ・家庭学習においては、課題を提示する教師とそれに取り組む生徒が十分に呼応しておらず、定期的に計画的に学習課題を与えていたにもかかわらず、をきちんとやり遂げることができていない生徒が多かった。今後は学校と家庭が連携した取組み強化が必要である。
(2) 自ら考え正しく判断し、他を思いやる行動ができる生徒の育成							
教育活動	●志を高める教育	生徒が主体的に「自らの生き方」を考え、進路を決定できるような指導の確立	◇進路指導やキャリア教育を充実させることによって、将来の夢や希望をもっている生徒の割合を80%以上にする。	・職場体験などのキャリア教育を充実させることによって、生徒が主体的に「自らの生き方」を考え進路決定できるようにする。	A	・「自分の将来の夢や目標をもっている」と回答した生徒は76%、「子どもと将来のことや中学校卒業後の進路について家庭で話し合っている」と回答した保護者は86%、「将来の職業や卒業後の進路について考えさせる指導に取り組んだ」と回答した職員が94%であった。 アンケートスコア【80】	・評価項目に取り上げていないあいさつや清掃活動におけるアンケート評価が良くなかったため、今後の課題である。 ・ソーシャルスキルトレーニングや対話活動については継続的な取組みが大切なので、次年度も取り組んでいきたい。
		生徒の自己肯定感を高める指導の工夫	◇体育大会などの学校行事に積極的に参加したと答える生徒の割合を80%以上にする。 ◇「有明中に通ってよかった」と答える生徒の割合を80%以上にする。	・生徒中心の実行委員会を設置し、生徒の自主的な運営が促進されるよう支援を行う。 ・生徒による企画運営の機会を多く与える。 ・運営自体をできるだけ生徒に任せることができるよう環境を整える。	A	・「学校行事に積極的に参加した」と回答した生徒は93%、保護者は91%、職員が100%であった。 アンケートスコア【89】 ・「有明中に通ってよかった」と回答した生徒は96%、保護者は98%、職員が94%であった。 アンケートスコア【88】	
	●心の教育	「特別の教科 道徳」(道徳科)の研究推進	◇道徳科の研究を深め、その成果を研究発表会において公開する。	・道徳教育を校内研究のテーマとして全職員で取り組み、その指導及び評価についての能力の向上を図る。 ・各学年が全職員で授業構想に積極的に関わりながら授業研究会を実施することで、道徳の指導力の向上を図る。	A	・昨年11月13日に道徳科の研究発表会を実施することができた。町内外から200名を超える参加者があって、ある一定の成果はあげることができた。 ・「道徳の授業や奉仕活動などを通してよい心が育っている」と回答した生徒は89%、「心の教育に取り組んでいる」と回答した保護者は91%、「道徳の授業や奉仕活動などを充実させることで、生徒の豊かな心が育っている」と回答した職員が88%であった。 アンケートスコア【82】	
		豊かな人間関係を構築するためのコミュニケーションスキルの向上を図る。	◇トーク集会を学校行事に計画的に位置付け、自らを表現する生徒の育成に全校体制で取り組む。	・グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、支持的風土のある学級づくり(集団作り)を行う。	B	・「道徳の授業やトーク集会などを通して『自分の考えや思いを伝える力』が育っている」と回答した生徒は84%、保護者は86%、職員が88%であった。 アンケートスコア【77】	

●いじめの問題への対応	いじめの未然防止、早期発見・早期対応等の体制づくり	◇「学校に行くのは楽しいと思う」という問いに「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答える生徒の割合 80%以上をめざす。 ◇いじめに対する早期発見・早期対応により重大事案になることを0に防ぐ。	・「学校生活アンケート」を定期的に行い、その結果内容を生徒指導協議会において全職員で共有し対処していくことで早期解決をめざす。 ・授業規律や生活ルールを守ることを徹底させ、生徒の落ち着きのある学校生活をめざす。 ・QU テストの実施により、経験則のみではなく客観的な視点において個々の状況を把握し、いじめの未然防止、早期発見に努める。 ・学級や学年において支持的風土を醸成、いじめの起こりにくい環境づくりに努める。	A	・「学校に行くのは楽しい(楽しんでいる)」と回答した生徒は 95%、保護者は 95%、職員が 94%であった。 アンケートスコア【83】 ・「安心して学校生活を送っている」と回答した生徒は 96%、保護者は 93%、職員が 95%であった。 アンケートスコア【83】 ・いじめの覚知・認知を行った場合の対応を素早く行った結果、重大事案0にすることができた。 ・学校生活アンケート」を月1回確実に実施し、その結果内容を生徒指導協議会において全職員で共有し対処することができた。	・いじめ問題を含めた生徒指導に関しては、今後も継続して「生徒指導協議会」を中心に職員一丸となった早期発見・早期対応を維持していく。
	人権・同和教育の推進と充実	◇QU による学校生活満足群の割合を向上させる。 ◇人権をテーマにした学活や道徳の授業を全クラス1回以上行う。 教育 活	・QU により学級集団や生徒の状態を把握し適切な支援を行う。 ・全生徒が人権作文・標語に取り組むよう指導する。 ・生徒支援教員の効果的な運用について研究し実践する。	A	・QU を年2回実施し、その結果分析のために研修会を実施した。学級集団や生徒の状態を把握し適切な支援を行うための具体的な改善策を講じることができた。 ・全生徒が人権作文・標語に取り組むことができた。「人権・同和教育にしっかり取り組んでいる」と回答した生徒は 89%、保護者は 89%、職員が 100%であった。 アンケートスコア【81】	

(3) 特別支援教育推進体制の構築

教育活動	○生徒の個に応じた支援、ニーズに対応した支援の推進	配慮を要する生徒への支援体制の充実	◇個別指導の時間数を生徒一人に対して平均 200 時間以上になるよう時間割を編成する。	・専門家による巡回相談を積極的に活用し、本校支援体制に対する助言を積極的に受け入れ、支援をよりよく改善していく。 ・支援に適した環境を可能な限り整える。 ・アンケートや教育相談による情報の収集および保護者等への情報の提供を行う。	B	・支援を要する生徒 1 人に対して教師が横について個別に支援した年間時間数 (2 月末現在) は 645 時間であった。 アンケートスコア【77】	・発達障害のある生徒、持つと思われる生徒への支援をさらに充実させるために、インクルーシブ社会実現に向けた保護者や地域の理解や協力が今後ますます必要になってくると思われる。
		生徒理解のための研修・協議会の計画的な実施	◇特別支援教育関係、またはそれに関連する内容の研修会や協議会、連絡会を年 5 回以上開催する。	・生徒指導協議会、教育相談部会等の開催を年間計画や週時程に位置付けて実施する。	A	・特別支援教育関係、またはそれに関連する内容の研修会や協議会、連絡会、ケース会議などを年 9 回開催した。また生徒指導協議会でも毎回、該当生徒について情報交換を行い、共通理解を図った。 アンケートスコア【87】	

(4) 部活動マネジメント力の向上

学校運営	○部活動の充実	生徒が主体的に活動できる計画的・効果的な部活動の実践	◇部活動が充実していると答える生徒の割合 80%以上をめざす。	・長期休業中に生徒を主体とした部活動の在り方やコーチング技術の向上を図る職員研修を実施する。	A	・「部活動が充実している」と回答した生徒は 95%、保護者は 85%、職員が 76%であった。 アンケートスコア【82】	・生徒のゲーム依存等による基本的な生活習慣の悪化が年々深刻化している。このことが学校生活(学習や部活動)にも大きな影響をもたらしている。PTAなどの力を借りながら改善していかなければならない。
	●健康・体づくり	生徒の自己管理能力の増進	◇朝食の喫食率 95%をめざす。 ◇生徒の自力登校 90%以上をめざす。	・早寝、早起き、朝ごはんの充実を呼びかける。 ・各種集会等を通して生徒だけでなく、保護者に対しても自力登校の必要性について説き、その啓発を図る。	B	・「毎日朝ご飯をきちんと食べている」と回答した生徒は 94%、保護者は 95%であった。 アンケートスコア【92】 ・「自力登校をしている」と回答した生徒は 89%、保護者は 87%、職員が 59%であった。 アンケートスコア【78】	
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	「働き方改革」に伴う教職員の部活動の在り方改革	◇部活動での指導の在り方や指導体制を見直すとともに定期的な休養日を設定するなどして、教職員が部活動の在り方について研究する。	・毎月の部活動休養日(第3日曜)及び定時退勤日(毎週水曜日)の徹底を図る。 ・休養を含めた上での計画的・効率的な部活動経営の在り方を研究する。	B	・毎月の部活動休養日(第3日曜)及び土日どちらかの休養日とも毎月部活動調査によって実施状況を確認した。どちらも県・町が示した「部活動の在り方ガイドライン」に沿った形になっている。しかしその他の働き方改革がまだまだすすんでおらず職員アンケートでは低い評価にとどまっている。 アンケートスコア【66】	

(5) 学校・家庭・地域・小学校とのつながりを大切にした「地域とともにある学校づくり」

学校運営	○地域と連携した特色ある学校づくり	コミュニティ・スクールとして地域に根差した学校づくりの推進	◇地域人材を活用した授業や行事を年5回以上実施する。 ◇生徒による地域貢献活動を年間3回以上実施する。 ◇情報公開を推進し、学校HPの更新回数を100回以上行う。	・生徒会活動を中心に、地域の活動に積極的に参加したり、校外活動やボランティア活動に取り組んだりして地域に貢献する。 ・学校通信「Heartful」や学校パンフレットを有明中学校区内に配布したり、体育大会や文化発表会などの行事に地域の人々を招待したりしながら、地域との交流に努める。	B	・「職場体験学習」や「職業人に聞く」など地域の方々の協力を得た学習を実施したが、「地域の人などの外部の指導者を積極的に活用している」と回答した生徒は 88%、保護者は 75%、職員が 65%であった。 アンケートスコア【74】 ・募金や清掃活動、イベントスタッフなどボランティア活動を生徒会が中心になって行った。「地域に貢献する活動を行っている」と回答した生徒は 75%、保護者は 75%、職員が 71%であった。 アンケートスコア【72】 ・「学校での出来事や行事等の情報を頼りやHPでよく発信している」と回答した生徒は 78%、保護者は 88%、職員が 100%であった。 アンケートスコア【80】	・地域に貢献する活動には積極的にやってきたが生徒や保護者の評価が低かったのは、一部の生徒が先行して行って、全生徒への広がりがなかったためと思われるので改善したい。
	○小中連携の推進	小中学校の職員やの子童・生徒の相互交流活動の推進充実	◇小中学校の交流回数年10回以上をめざす。	・服務規律や人権・同和教育、教育相談や特別支援教育などに関して合同の職員研修会を実施して、小中相互の教職員の連携を図る。 ・体育大会や運動会、文化発表会や学習発表会等、小中の学校行事等で児童・生徒の交流を推進する。 ・新入生対象の学校説明会、中1生徒が出身小学校を訪問して中学校についての情報提供を行う「ようこそ先輩」などを実施して、小中の接続をスムーズにする。 ・中学校教職員による小学校での出前授業に積極的に取り組む。	B	・「小中連携のための交流活動を行っている」と回答した職員が 65%であった。 アンケートスコア【68】 ・小中学校の交流として、生徒の小中学校運動会へのスタッフとしての参加、「ようこそ先輩」と題した中学校説明、文化発表会への小学生の招待など行ったが、年10回には届かなかった。職員同士の合同研修会の実施もできず、新入生についての連絡会のみであった。	・職員による小中交流を推進していく中で、連携事項などが生まれてくるので、まずは交流を活発化したい。

●： 共通評価項目のうち必須項目 ○： 学校独自評価項目 アンケートスコア： 生徒・保護者・職員によるアンケートの回答の平均を100点満点に換算したもの。